

春はよみがえる

小川未明

青空文庫

太陽ばかりは、人類のはじめから、いや、それどころか、地球のできたはじめから、光のとどくかぎり、あらゆるものを見てきました。この町が火を浴びて、焼け野原と化し、緑の林も、風に吹かれた木立も、すべて、あと形もなくなつたのを知っていました。いつしか、そのときから、はや五、六年たつたのであります。

「いま一度、起き上がる気があつたら、力をためすがいい。」
長い間、自然の栄枯盛衰を見てきた、偉大な母である太陽は、町の焼けて焦土となつたその日から、下を見下ろして、こういいました。

そして、風は建物の無惨な傷口をなで、雨は土の深手を静かに洗つたのです。そのうち、ところどころ新しい家が建ちはじめ、人々の手によって、植えられた木立は、ふたたび林となりました。小さな庭にさえ、すすすすくとして、木が風にその小枝を吹かせたのです。

やがて、冬が去り、春になろうとして、気流は争いました。乱れる雲の間から、太陽は下界をのぞいて、たゆみなき人間の努力をながめながら、

「おお、いい町ができました。」と、ほほえみました。

すると、若木をゆるする風が、

「昔も、あちらに、煙突があつて、いつも黒い煙が上がつていた。」と、ささやきました。

雲や、風ばかりでなく、小鳥たちも、前に遊んだのを思い出したのか、今朝、めずらしくうぐいすが飛んできて、いい声で鳴きました。

「おや、うぐいすがきたよ。」

正吉は、おどろきのあまり、この喜びをだれとともに語ろうかと、家から外へかけ出しました。

この近くに、一人の画家が、住んでいました。あの人ならきつと、いっしょに喜んでくれるだろうと思ひました。

「おじさん、うぐいすを聞きましたか。」

正吉は、へやへ入るなり、いいました。

「聞いたよ、君も聞いてどうだった。やはりうぐいすはいいね。戦後はじめてだろう。これだよ、平和の春らしくなった。」と、画家は、窓を開けて、まぶしそうに青空を見上げ、はればれとした顔つきをしました。

「正しょうちゃんなんか、これからだ。ぼくみたいに年としをとると、若わかいうちのように旅たびへも出でられないから、春はるがきて花はなでも見るより、ほかに楽たのしみはないが、うぐいすの声こえを聞きいたとき、さすがに生いきがいを感かんじたよ。また、花はなの咲さくうちは、たびたびきてくれるだろう。」と、画が家は、自し然ぜんに對たいして、感かん謝しゃしたのでした。

正しょう吉きちは、こうして、人にん間げんがごとごとく平へい和わを愛あいするなら、この世よの中なかはどんなに楽たのしかろうと思おもいました。しかしこのとき、彼かれには一まつ抹ふの不安ふあんが、心こころにわき上あがったのです。また同どう時じに、どうかそんなことが起おこらぬように、そして、おじさんも自じ分ぶんも、平へい和わな春はるが楽たのしまれるようにと、祈いのったのでした。その平へい和わをかき乱みだしはしないかと、正しょう吉きちの氣きにかかったのは、このごろ、この町まちへ越こしてきた青あお服ふくの男おとこのことでした。どどとなくきざに見みえる、その男おとこはサングラスをかけ、青あお地じの服ふくを着きて、毎まい日にち空くう氣き銃じゆうを持もち、この付ふ近きんをぶらついていました。

さらに、事じ実じつを上あげると、先せん日じつのこと、男おとこは、かきの木きにとまった、すずめをねらつていました。この木きは火ひをまぬかれた老ろう木ぼくで、枝えだを張はり、すずめなどのいい遊あそび場ば所じよでした。だれでも、こうした光こう景けいを見みるなら、生せい物ぶつの命いのちのとうときさを知るしるものは、神かみの救すくいを祈いのつたでありましよう。正しょう吉きちも、心こころのうちで、どうか弾たまのはずれるようにと願ねが

つていました。しかし、精巧な機械のほうか、よりその結果は確実でした。たぶん、子すずめを助けたいばかりに、親すずめが身がわりになったらしく、いっしよに逃げればよかつたものを、ただ一羽だけ、じつとして、弾に当たったのでした。

正吉 だけでなく、酒屋の主人も、このありさまを見ていました。

「あれは、たしかに親すずめが、身がわりになったんだよ。かわいそうにな。」と、正吉が青服にきこえるように、いうと、

「どこか、かわいそうなんだ。そういうなら、牛肉も、魚も、食べないかい。ばかをいっちゃ困るよ。」と、青服は、せせら笑いました。

赤い顔の酒屋の主人は、青服に近よって、

「旦那、いい空気銃ですね。そこらのおもちやとちがつて、だいいち鉄砲がいいや。」
と、ほめました。

青服は、銃がいいので当たると、酒屋の主人がいったとでもとつたか、

「なに、おれは腕に自信があるんだよ。先だつても浜の射的屋で、旦那、どうかごかんべんねがいますって、あやまれたんだぜ。ねらつたが最後、はずしっこないからな。」
と、青服は自慢しました。それから、木の下へいって、落ちたすずめをひろいました。

さつきまで、仲間とさえずりあっていた、哀れな鳥は、もはや屍となつて、かたく目を閉じていました。

「やはり、今のものなら、日本製でしようね。」と、主人が聞くと、

「ちがう。戦争前のドイツ製さ。これなら、かもでも、きじでも、なんでも打てるよ。

こんどうずら打ちにしようと思つている。」と、こう答えて、青服は、獲物をみつめるように、目をかがやかせました。

「おもしろいでしょうね。」と、わざとらしく、酒屋の主人は、あいづちを打ちました。

「なによりも、殺生とかげごとが、大好きだなんて、困つた性分さ。」と、青

服は、自分をあざけりながら、他人のいやがることを好むのが、近代的と思ひこみ、かえつて誇りとするらしく見えました。

「どれ、見せてください。あなたの鉄砲を。」

「おれんでない、家主のだよ。ただ打つのがおもしろいので、食べやしないから、みんな鳥は借り賃にやつてしまうのさ。なんで、あのけちんぼが、ただで、銃なんか貸すもんか。」

「じゃ、鳥は、みんな家主さんに、やるんですね。」

「おとといだか、打つたもずをやると、すずめより、大きいって、喜んだよ。」

正吉が、それを聞いて、この男は、禁鳥でも打つのかと、おどろきました。彼が空気銃を持って歩くかぎり、小鳥たちにも、この町にも、平和はないという気がしました。

うぐいすの声を聞いて、画家をたずねてから、はや、二、三日たちました。いつも朝起きる時分に鳴いたのが、急にその声がしなくなりしました。正吉は、なんとなく、不安を感じたのです。学校の休みを待って、心の引かれるまま、うぐいすのきた方角へ出かけてみました。道ばたの畑には、梅の木があり、桜の木があり、また松の若木がありました。戦後になって、どこからか植木屋がここへ移植したものです。いろいろの下草は、霜にやけて赤く色づいていたし、土は、黒くしめりをふくんでいました。

正吉は、まだ深くも探してみないうちに、それは、真に偶然でした。ふと足もとを見ると、草の中に落ちている、小鳥の死骸が目にはいりました。はつと思つて、予期したとおりで、胸がどきどきしました。けれど、まだうぐいすと信じきれず、手にとつて見ると、草色をした羽は、すでに生色がなく、体はこわばっているが、うぐいすにちがいはなかったのです。おそらく、声がしなくなった日に打たれたので、ねこも気がつか

なかつたとみえました。

正吉は、さつそく画家に知らせました。そして、いいました。

「たしかに、あの青い服を着た男が、空気銃で打つたのです。」

「せつかく山から、林をつたつてきたのを、思いやりのないことをしたものだな。」と、画家は、うぐいすの死を悲しみました。

「ほんとうに、悪いやつです。」と、正吉は、いいました。

「どんな顔の男だな。」と、画家が、聞きました。

正吉は、自分の知るだけのことを、くわしく話して、

「青服は、自分の口から、かけごとと殺生がなにより大好きだから、やさしい顔はしていませんよ。酒屋のおじさんが、あの男は、べつに仕事もせず、競輪や、競馬で、もうけた金で、ぶらぶらして暮らすんです。そして、お体裁にあんな日よけ眼鏡をかけているのだから。」

「そうか、与太者らしいな。まじめな人間なら、そんなふうをしないし、殺生をなにより好きだなどといわぬだろう。いまごろ、はやりもしない空気銃を、どこから持ち出したものか。」と、画家は、不審に思いました。

「あすこの空き地へ二軒つづきの家が幾つも建つたでしょう。あすこにいるんですよ。銃は家主から借りて、自分は打つのがおもしろいので、鳥は家主にやるといいました。家主は、戦争中、竹の子生活をした人から、時計や、双眼鏡や、空気銃など安く買い取つたのだと、やはり酒屋のおじさんがいっていました。」と、正吉は語りました。

「あたりが、やっとおちついて、昔のような平和がきたと思つたら、いつのまにか、人間の心が変わってしまったて、信用どころか、なんだか危険で、油断ができなくなつたよ。」と、画家は歎息しました。

「酒屋さんは、ああいうのを、アプレゲールとか、いうので、いままでの日本人とちがつているのだと、いつていましたよ。」

「正ちゃん、見ていてごらん、その男は、きつとろくなことをしでかさなから。」と、画家は予言しました。

それから後というもの、正吉は、青服の男が、子供の目を打ちぬかないか、また、ガラス窓を破つて人を傷つけはしないかと、心配したのでした。

さむい風が吹いて冬が逆もどりしたような日でありました。青服は、屋根にとまって

いるすずめをねらつていたが、パチリ！と、引き金をひくと、たまが命めいちゆう中ちゆうして、すずめはもんどり打うつて、とよの中なかへころげ込みました。どこで見みていたか、ふいに黒くろねこが飛び出だして、すずめをさらつて逃げようとすのを、すばやく青服あおふくは、そのねこをねらつて打うちました。ねこは悲鳴ひめいをあげ、屋根やねをつたつて、姿すがたを消けしました。たぶんそのあとに、血ちがたれたと思おもいます。これを見みた青服あおふくは、さも心地こころちよげに、

「わつは、は、は。」と、声こえをたてて笑わらいました。

「あのねこは、ペンキ屋やのだよ。」と、見みていた子供こどもたちがいつていると、ペンキ屋やから、顔かおを真ま赤かにして、若者わかものがとび出だしました。この家いえのせがれのかんしやく持もちは、このあたりで知しらぬものが、なかつたのです。

「どいつだ、うちのねこを打うつたのは！」

「やい、てめえか。」と、いきなりせがれは、青服あおふくの手てから空くう気き銃じゆうをもぎとりました。

暴ぼう力りよくと暴ぼう力りよくのはたしあいでした。青服あおふくがなにかいにかけるのを聞きかばこそ、台だいじりをさかさじゆうに銃じゆうを振ふり上あげて、力ちからいっぱい折おれよとばかり地面じめんにたたきつけました。この一撃げきで、さしも精せい巧こうなドイツ製せいも、銃じゆう身しんがみにくく曲まがってしまいました。

正吉しょうきちはあとで、この事件じけんを聞きいたのであるが、これがため、青服あおふくは家主やぬしに銃じゆうを返かえ

されなくなつたので、弁償べんしょうすることに、話はなしがついたといいました。

ところが、それ以来いらい、青服あおふくには、競輪けいりんも、競馬けいばも、いっこうに運うんがむいてこず、金かねの工面くめんに苦しみました。一方ほう、家主やぬしからは、矢やつぎばやに金かねをさいそくされたのであります。

ついに、青服夫婦あおふくふうふは、この町まちにいたたまらなくなつて、ある晩ばん、どこかへ、居所いどころをくらましてしまいました。そして、だれの目めにも、あばずれ女おんなとしか見えなかつた青服あおふくの若い女わか房にようぼうは、ふだん唇くちびるを紅あかくぬつて断髪だんぱつをちぢらしていたが、雲くもがくれする前まえのこと、

「わたしたちみたいなの、ばかはないよ。うちのひとが、鉄砲てつぱうを打うつのがうまいからつて、いやがるのをむりに打うたし、とつた鳥とりはみんな取り上あげておきながら、鉄砲てつぱうがいたんだから、お金かねで、弁償べんしょうせいと、どこにそんな強欲ごうよくの家主やぬしさんがあるうか。どちらがまちがつているか、みんなに聞いてもらいたいもんだ。」と、悪口わるぐちを世間せけんへいいふらししました。

これを聞いて、事情じじょうの知らぬ人ひとたちは、金持かねもちや、家主やぬしにありそうなことだと、逃にげ出した青服夫婦あおふくふうふへ、同情どうじょうしたかもしれませぬ。

このような、おのれを弱者と見せかけて、世間を偽ろうとする、不正直者が、このごろだんだん多くなつたのでした。

正吉は、これをにがにがしく思いました。ひつきよう恥を感じなくなつた人間は、自分というものがなくなつたので、どこまで、墮落するものだらうかと考えました。

こうして町では、人々が、喜んだり、悲しんだり、たがいに争つたりするうちに、いつしか春めいてきました。大空で太陽は、すべてを見なければ、干渉しようとはしなかつたのです。そして永久に、ただ愛と恵みとしか知らない、太陽の光は、いつも、うららかで、明るく、平和で、善と美に満ちていました。

ある日、正吉が画家を訪ねると、もう、すべてのことを知っていて、画家のほうから、

「あの空気銃を持つて、鳥を打つて歩いた男は、どこかへいったという話だね。」と、顔に明るい表情をただよわしながら、いいました。

「それに、おじさん、聞きましたか、ペンキ屋のせがれが怒つて、空気銃を地面へたたきつけてもう打てなくしてしまつたんですよ。」と、正吉は、告げたのです。画家は、そのことも、だれかに聞いたとみえて、知っていました。

「ああ、それでいいんだよ。そんなものさえなければ、持つものもないんだからね。」
なるほど、それで、ほんとうにいいのだと、正吉は思いました。こんどのことで、いちばん損をしたのは、高価な銃をなくし、世間からわるく思われた家主であろうと、考えたので、画家にそう話すと、
「いつも、自分だけ得をしようとする、家主の量見がちがつているから、銃を曲げられたのは、罰があたったのだよ。たとえなんと世間からいわれても、平常の心がけがよくないから、これもしかたがないのだ。なんにしろ、あぶない銃を打つやつがいなくなつて、やつと安心したよ。」と、画家は、さも、うれしそうでありました。
「すずめも、これから安心ですね。もうあんな青服みたいな人間がこなければ、いいんだがなあ。」と、正吉がいうと、
「もうこやしないから、安心したまえ。そうわるいやつばかりでないだろう、君のようないい少年もいるのだから。」と、画家は、正吉をばげました。
「ああ、春がきた。」といつて、二人は自然の偉大なる力を信ぜず、いられませんでした。

青空文庫情報

底本：「定本小川未明童話全集 14」講談社

1977（昭和52）年12月10日第1刷発行

1983（昭和58）年1月19日第5刷発行

底本の親本：「太陽と星の下」あかね書房

1952（昭和27）年1月

初出：「小学六年生 3巻11号」

1951（昭和26）年1月新年特別号

※表題は底本では、「春《はる》はよみがえる」となっています。

入力：特定非営利活動法人はるかぜ

校正：酒井裕二

2017年2月2日作成

青空文庫作成ファイル：

このファイルは、インターネットの図書館、青空文庫（<http://www.aozora.gr.jp/>）で作られ

ました。入力、校正、制作にあたったのは、ボランティアの皆さんです。

春はよみがえる

小川未明

2020年 7月18日 初版

奥 付

発行 青空文庫

URL <http://www.aozora.gr.jp/>

E-Mail info@aozora.gr.jp

作成 青空ヘルパー 赤鬼@BFSU

URL <http://aozora.xisang.top/>

BiliBili <https://space.bilibili.com/10060483>

Special Thanks

青空文庫 威沙

青空文庫を全デバイスで楽しめる青空ヘルパー <http://aohelp.club/>
※この本の作成には文庫本作成ツール『威沙』を使用しています。
<http://tokimi.sylphid.jp/>